〈新　刊　紹　介〉

澤田治美・仁田義雄・山梨正明編『場面と主体性・主観性』

本書は，文をはじめとした言語表現の形式・構造・意味内容に影響を与える場面や言語主体等の問題をめぐる多様な論文を集めた書である。ひつじ研究叢書〈言語編〉第148巻として刊行され，編者の一人である澤田治美氏の古稀記念論文集を兼ねる。

本書の構成は次のとおり。「まえがき（仁田義雄）」「序論（澤田治美）」に続く，五部構成。「I　場面　Situation」は「限定を表すとりたて表現が使われる場面と主体性・主観性――日本語とスペイン語の対照研究――（野田尚史）」「発話場面を切り取る文法的手段の類型――「現実嵌入」の観点より――（堀江薫）」「日本語「～てある」構文の話し手（観察者）と行為者――話し手・発話場面の重要性――（高見健一）」「場面と意味概念化における文脈化・その複層性――引用構文の分析を通して――（藤井聖子）」「親族名称の子供中心的用法の類型と場面，視点――対照語用論的アプローチ――（澤田淳）」「英語における場所の前置詞――認知言語学と位相空間論の接点を求めて――（今仁生美）」，「II　主体性・主観性　Subjectivity」は「発話の主観性と構文のメカニズム――語用論的構文論に向けて――（山梨正明）」「認知語用論と主体性――ポライトネスを中心に――（林宅男）」「ムーアのパラドックス，思考動詞，主観性（飯田隆）」「矛盾文と「望ましさ」主観性について（阿部宏）」「日本語形容詞文と主観分化（加藤重広）」「係助詞の主観性（半藤英明）」「主観性から見た日本語受動文の特質（益岡隆志）」，「III　モダリティと証拠性　Modality and Evidentiality」は「モダリティと命題内容との相互連関（仁田義雄）」「What is happening to must in Present-day English?: A contrastive perspective on a declining modal auxiliary（Karin Aijmer）」「Modal concord in Swedish and Japanese（Lars Larm）」「日本語の証拠性と言語類型論（宮下博幸）」「モダリティーの主観化について――〈必要〉を表す文の場合――（宮崎和人）」「英語法副詞と英語法助動詞の共起と話し手の心的態度について（岡本芳和）」「束縛的モダリティを表す need to と have to をめぐって――動機づけとメンタル・スペースの観点から――（長友俊一郎）」，「IV　命題・文に対する態度　Propositional and Sentential Attitudes」は「Logic and lexical semantics of propositional attitudes（Daniel Vanderveken）」「累加の接続詞とその論理（森山卓郎）」「「気持ちの言語化」の日中対照（井上優）」「The discourse-pragmatic properties of the Japanese negative intensifier *totemo*（Osamu Sawada（澤田治））」「日本語の自動詞・他動詞・受身の選択――日韓中母語話者の比較――（杉村泰）」「中古語の実在型疑問文をめぐって――『枕草子』を資料として――（高山善行）」「「語り」におけるスペイン語直説法過去完了の機能（和佐敦子）」，「V　言語行為と談話　Speech Acts and Discourse」は「モダリティの透明化をめぐって――疑似法助動詞 have to を中心として――（澤田治美）」「アイデンティティと同定――言語行為論における一つの説明――（久保進）」「Meaning in the use of natural language（Candi-

da de Sousa Melo)」「ドイツ語の談話標識 Weißt du was?［英 You know what?］の通時的発達――説教集，戯曲，小説，映画における言語使用から見る変化の経路――（佐藤恵）」を収める。末尾に「あとがき（山梨正明）」「執筆者一覧」を付す。（阿久澤弘陽）

（2019 年 4 月 26 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　792 頁　15,000 円＋税　ISBN 978-4-89476-844-4）

宮島達夫著『言語史の計量的研究』

本書は，計量的な研究を中心とした氏の論文集である。「Ⅰ方法論」「Ⅱ近代語」「Ⅲ対照」「Ⅳ言語全体の語彙比較」「Ⅴ意味」の五部からなる。

本書の構成は以下のとおり。「はじめに（まつもとひろたけ）」に続き，「Ⅰ方法論」に「第 1 章　総索引への注文」「第 2 章　語いの類似度」「第 3 章　英語作品の用語の類似度」「第 4 章　万葉と古今の用語の比較」「第 5 章　単位語の認定――調査単位のながさの問題――」「第 6 章　単語の使用度数と長さ・古さ」「第 7 章　古典作品の特徴語」「第 8 章「言語の経済力」の歴史的展望」「第 9 章　外来語と「外行語」」「第 10 章　日本語の書きことば」「第 11 章　黙読の一般化――言語生活史の対照――」，「Ⅱ近代語」に「第 1 章　近代日本語における単位の問題」「第 2 章　現代語いの形成」「第 3 章　意味分野と語種」「第 4 章　専門語の諸問題」「第 5 章　文体・語彙・文法・表記」「第 6 章　小説の口語化」「第 7 章　近代日本語における漢語の位置」「第 8 章　和語の漢字表記」「第 9 章　「漢字の将来」その後」「第10章　憲法の口語化」「第11章　「共産党宣言」の訳語」「第12章　『日本国語大辞典』（第二版）における初出文献の改訂」「第 13 章　戦時下日本の語彙」「第 14 章　「テレビ」と「電視」――「電視」は和製漢語か――」「第 15 章　母音の無声化はいつからあったか」，「Ⅲ対照」に「第 1 章　日本語・ドイツ語のなかの外来語」「第 2 章　日本語とドイツ語の外来語」，「Ⅳ言語全体の語彙比較」に「第 1 章　語彙発展の対照研究」「第 2 章　日本語の〈危機〉」「第 3 章　世界の言語と日本語の将来」「第 4 章　日本語語彙史」「第 5 章　英語語彙史の計量的調査」「第 6 章　日中語彙史の比較」「第 7 章　フランス語語彙史の計量的調査」「第 8 章　日本語とドイツ語の語彙史の比較」「第 9 章　漢字文化圏から漢語文化圏へ」，「Ⅴ意味」に「第 1 章　カテゴリー的多義性」「第 2 章　カテゴリー的多義の比較」「第 3 章　道具名詞の連語論」「第 4 章　動作範囲の拡張」を収める。末尾に「解説（鈴木泰・安部清哉）」「おわりに（ゆもとしょうなん）」「索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2019 年 6 月 22 日発行　笠間書院刊　A5 判横組み　948 頁　18,000 円＋税　ISBN 978-4-305-70877-9）

小林芳規著『平安時代の佛書に基づく漢文訓讀史の研究　第九冊　訓點表記の歴史』

本書は，著者による全十冊（当初は全十一冊を予定）から成る『平安時代の佛書に基づく漢文訓讀史の研究』の第九回配本である。

「第一章　緒説」に「第一節　訓點表記の歴史と課題」「第二節　訓點表記の研究史素

描」「第三節　日本の初期訓點の諸符號と新羅加點の符號との緊密性」,「第二章　符號から觀た新羅加點の日本の初期訓點への影響」に「第一節　諸説」「第二節　佐藤本華嚴文義要決の諸符號と日本の初期加點本の諸符號との一致」「第三節　合符における新羅加點の日本の初期訓點への影響」,「第三章　訓點における假名字體の變遷」に「第一節　諸説」「第二節　平安初期（九世紀）の假名字體」「第三節　平安中期（十世紀）の假名字體」「第四節　平安後期（十一世紀）の假名字體」「第五節　院政期の假名字體」「第六節　終りに」,「第四章　訓點における和訓表記の漢字」に「第一節　諸説」「第二節　和訓表記の漢字（假名に準ずる漢字）」「第三節　平安初期訓點資料における和訓表記の漢字」「第四節　平安中期訓點資料における和訓表記の漢字」「附説　新撰字鏡における和訓表記の漢字について」,「第五章　使用初期のヲコト點特殊點甲類・乙類の展開」に「ヲコト點研究の殘された問題」「日本の使用書記のヲコト點と特殊點甲類・乙類」「第三節　特殊點乙類の類別」「第四節　同一の經卷又は一具の經典に加點された特殊點と同在する別系統のヲコト點の性格」,「第六章　返讀符の始源とその變遷」に「序節　緒言」「第一節　返讀符の始源」「第二節　中國・朝鮮半島との關聯が考えられる符號」「第三節　日本において新たに考案された返讀符」「第四節　日本における新たな機能を持った返讀符」「第五節　一字返讀專用の返讀符の考察」「第六節　日本における返讀符變遷の原理」「第七節　返讀符の加施位置の變遷」,「第七章　合符の始源とその變遷」に「第一節　はじめに」「第二節　合符の時代別變遷」「附節　熟字の特殊な加點法」,「第八章　訓點における疊符の變遷」に「第一節　疊符についての先學の説」「第二節　平安時代の訓點資料における二字疊符の推移」「第三節　鎌倉時代・室町時代の訓點資料における二字疊符」「第四節　片假名文における二字疊符」「第五節　二字疊符の形態變遷の原因等」,「第九章　訓點表記の變遷の原理」に「第一節　諸事象にわたる共通點」「第二節　複數の事象に共通する變遷の原理」を収め，末尾に「本册の内容の基となった既發表論文等」を付す。（田中佑）

（2019 年 6 月 28 日発行　汲古書院刊　A5 判縦組み　496 頁　16,000 円＋税　ISBN 978-4-7629-3599-2）

Joan Bybee 著，小川芳樹・柴崎礼士郎監訳，小川芳樹・下地理則・縄田裕幸・中山俊秀・浜田啓志・長野明子・家入葉子・久米祐介・柴崎礼士郎・小笠原清香・深谷修代・山村崇斗・鈴木亮子・堀内ふみ野訳『言語はどのように変化するのか』

本書は，Joan Bybee 氏の著書 *Language Change*（Cambridge University Press，2015 年）の全訳である。

「第 1 章　言語変化の研究」「第 2 章　音変化」「第 3 章　より広い観点からの音変化と音韻変化」「第 4 章　音変化と文法の間の相互作用」「第 5 章　類推変化」「第 6 章　文法化――その過程とメカニズム――」「第 7 章　文法化の共通経路」「第 8 章　統語変化――構文の発達と変化――」「第 9 章　語彙変化――言語はどのように新しい語を獲得し，語はどのように自身の意

味を変えるのか――」「第 10 章　比較，再建，および類型論」「第 11 章　言語変化はなぜ起こるのか――内的要因と外的要因――」の 11 章から成り，末尾に「用語解説」「引用文献」「監訳者解説」「監訳者あとがき」「訳者注および監訳者解説引用文献」「索引」「著者紹介，監訳者・訳者紹介」を付す。（田中佑）

（2019 年 7 月 14 日発行　開拓社刊　A5 判横組み　464 頁　5,400 円＋税　ISBN 978-4-7589-2272-2）

釘貫亨著『動詞派生と転成から見た古代日本語』

本書は，奈良時代とその前後の古代日本語を対象に，動詞の派生的造語と形容詞転成を解明することで，古代語形成期の様相の特徴と本質を明らかにすることを目指した書である。

「序章」に続く二部構成（第一部：第一章から第三章，第二部：第四章から第六章）で，古代語の音声と表記に関する筆者の過去の二つの論考が補論として掲載されている。構成は次のとおり。「序章　派生と転成から見た古代日本語動詞の文法機能」「第一章　上代語尊敬語尾スの消長」「第二章　精神的心理的意味を表す動詞の増殖と活用助辞ムの成立」「第三章　話者願望表示の文法的方法と語彙的方法」「第四章　古代語形容詞の造語機能の特徴」「第五章　活用助辞タリ，リ，ナリの成立と連体修飾」「第六章　上代語動詞の形容詞転成の原初形態」「補論 1　上代語ラ行音と動詞形態」「補論 2　和歌における総仮名表記の成立」。末尾に「索引（人名・書名，用語）」「あとがき」を付す。（阿久澤弘陽）

（2019 年 8 月 20 日発行　和泉書院刊　A5 判縦組み　260 頁　7,500 円＋税　ISBN 978-4-7576-0914-3）

多和田眞一郎『沖縄語動詞形態変化の歴史的研究』

本書は，沖縄語の動詞形態変化の変遷を，資料収集とその分析から明らかにしたものである。各時代における沖縄語の実態を記述し，その変遷を明らかにすることを目指している。同時に変遷に対する解釈を与えることも目的としている。分析対象の資料が成立順に並べられ，その資料に対する説明が付されている。

本書の構成は次のとおり。「はじめに」「序章　分析対象資料及び用例収集のための前提」「第 1 章　ハングル資料の動詞形態の考察」「第 2 章　漢字資料の動詞形態の考察」「第 3 章　仮名資料の動詞形態の考察」「第 4 章　アルファベット資料の動詞形態の考察」「第 5 章　沖縄語動詞形態変化の通時的考察」「おわりに」。末尾に「注」「参考文献」「事項索引」「語彙索引（第 1 章～第 4 章の見出し語のみ）」を付す。（阿久澤弘陽）

（2019 年 8 月 28 日発行　武蔵野書院刊　B5 判縦組み　1380 頁　25,000 円＋税　ISBN 978-4-8386-0721-1）

近代語学会編『近代語研究 21』

本書は以下の 27 の論考から成る。「室町時代における「もの」形容詞についての一考

察――三大口語資料を中心に――（坂詰力治）」，「『両足院本毛詩抄』における「う」「うず」の用法（山田潔）」，「印度本節用集特殊付録私解（佐藤貴裕）」，「曾根崎心中における「の」の字体（坂梨隆三）」，「待遇表現として見た明和洒落本の命令表現（小松寿雄）」，「石塚龍麿『古言清濁考』板本の仮名字体（内田宗一）」，「悉曇学者行智の江戸語音声観察――タ行音の場合――（肥爪周二）」，「蘭学初期における二字漢語の構造――語順・語義・語法――（松井利彦）」，「『雅言集覧』の散文用例試論（平井吾門）」，「成城〈甲〉本「簸屑」の性格・用語と『和泉流秘書』（小林千草）」，「式亭三馬の蔵書に見る唐話関係資料に関して（長崎靖子）」，「滝沢家日記における「ニ付・間・故」について（大久保恵子）」，「近世における「方言書」の見方について――西澤一鳳『皇都午睡』における京坂語の比較を中心として――（丸田博之）」，「「日輪」から「太陽」へ――江戸の科学書を中心に――（米田達郎）」，「『福恵全書』抄訳本の左振仮名について（荒尾禎秀）」，「文字化という概念（今野真二）」，「「中央語」という思想――「中央語」は「国語」でも「標準語」でもなく，また，「地方語」の対概念でもないことについて――（村上謙）」，「昭和初期台湾における日本語教育月刊誌『薫風』『黎明』『国光』について――青年劇と地震の記事を中心に――（園田博文）」，「言語生活史資料としての大正6年『読売新聞』記事――「新聞記事データベース」活用の一例として――（新野直哉）」，「語種率・品詞率から見る明治・大正期の口語体実用文（近藤明日子）」，「近・現代の敬語形式にみる対象配慮の諸相（伊藤博美）」，「感謝・謝罪に見られる配慮表現「どうも」の成立（川瀬卓）」，「漱石作品におけるナド類助詞の様相――初期小説について――（北澤尚）」，「明治時代における偏の規範と統一（田島優）」，「日本語表記の学習書としての『春秋雑誌 会話篇』（常盤智子）」，「『改正増補英和対訳袖珍辞書』と異なる『英仏単語篇注解』の訳語について（4）（櫻井豪人）」，「ニコライ・レザノフ『露日辞書』にあるキリル文字で表記された日本語の語義難解語について（浅川哲也）」。末尾に「執筆者略歴」を付す。（田中佑）

（2019年9月30日発行　武蔵野書院刊　A5判縦組み　576頁　15,000円＋税　ISBN 978-4-8386-0723-5）

藤田保幸著『研究叢書515　複合助詞の研究』

本書は，共時的な観点から複合助詞（助詞的複合辞）の多様な表現性に光を当て，複合助詞の持つ複数の用法のつながりを整理しようとするものである。各論では，複合しているとは捉えられない辞形式や，形式名詞のような複合助詞に隣接するものも含め，凡そ20もの表現が取り上げられている。

「序言」に続き，「第1章　総論」に「1. はじめに――複合辞研究の立場――」「2. 複合辞が複合辞であるための共時的条件――動詞句由来の複合辞を中心に――」「3. 引用形式の複合辞への転成について」「4. 複合辞の連体形式について」を，「第2章　各論（一）――複合助詞表現の諸相――」に「1.「～ごとに」――雨がふるごとに，暖かくなる――」「2.「～拍子に」――転んだ拍子に，腰を打った――」「3.「～として」――誠は，長年研究所に貢献したとして，表彰された　など――」「4.「～とあって」――今日は十日戒とあって，たくさんの人が出ている――」「5.「～にしても」

――常識がないにしても，ほどがある　など――」「6. ～（よ）うと／（よ）うが」――誰が来ようと，会うわけにはいかない――」「7.「～ものなら」――そのようなことを口にしようものなら，ただではすまないぞ　など――」「8.「～となると」――直下型地震が起こったとなると，その被害は計り知れない――」「9.「～わりに」――ここの蕎麦は，高いわりにさほど美味くない――」「10.「～はおろか」――パソコンはおろかスマホさえ使ったことがない――」「11.「～からして」――ものの言い方からして，気にくわないなど――」「12.「～に至っては」――大根も白菜も値上がったし，ほうれん草に至っては通常の倍の値段だ――」「13.「～に限って」――うちの子に限って，そんなことをするはずはない　など――」「14.「～に限らず」――オランダ語は，オランダに限らずベルギーの北部でも話されている――」「15.「～について」「～につき」――会議中につき，静粛に願います　など――」「16.「～に比べて」――菜穂子は，弘実に比べて背が高い――」「17. ～に伴って」――医学の進歩に伴って，難病の治療に光明が見えてきた――」を，「第 3 章　各論（二）――複合助詞に隣接する形式の研究――」に「1.「形式名詞」再考――佐久間鼎「吸着語」の再検討を通して――」「2. 接続助詞的に用いられる「～あげく（に）」について――単一転成辞形式の一事例研究――」を，「付章　慣用句の研究」に「1.「折り紙をつける」という言い方をめぐって」「2.「名詞慣用句」について」を収録している。末尾に「初出一覧」「あとがき」「索引」を付す。（田中佑）

（2019 年 9 月 30 日発行　和泉書院刊　A5 判縦組み　610 頁　13,000 円＋税　ISBN 978-4-7576-0918-1）

飛田良文・佐藤武義編集代表，石井正彦編『語彙の原理――先人たちが切り開いた言葉の沃野――』

本書は，日本語語彙の総体を沃野に例え，その沃野を支えている原理（的なもの）を発見・提示することで，語彙とはどのようなものなのかという問題にアプローチする書である。語彙の基礎的な仕組みを明らかにする第一部，語彙の動態を明らかにする第二部，そして語彙の獲得と社会への共有を明らかにする第三部からなる。

本書の構成は次のとおり。「序　語彙の沃野への誘い（石井正彦）」に続き，「第 1 部　語彙の基礎」に「1. 語彙の性質（石井正彦）」「2. 語彙の分類（佐藤武義）」「3. 語彙の体系（宮田公治）」「4. 語彙の組織（山崎誠）」「5. 語彙の構造（金愛蘭）」，「第 2 部　語彙の動態」に「6. 語彙の運用（石黒圭）」「7. 語彙の創造（木村義之）」「8. 語彙の変化（池上尚）」「9. 語彙の交流（荒川清秀）」，「第 3 部　語彙の営為」に「10. 語彙の獲得（横山詔一）」「11. 語彙の教育（庵功雄）」「12. 語彙の流通（大谷鉄平）」「13. 語彙の批判（佐竹久仁子）」を収める。末尾に「執筆者紹介」と「索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2019 年 10 月 1 日発行　朝倉書店刊　A5 判縦組み　208 頁　3,700 円＋税　ISBN 978-4-254-51661-6）

辻幸夫編集主幹，楠見孝・菅井三実・野村益寛・堀江薫・吉村公宏編集『認知言語学大事典』

本書は，認知言語学の各領域と関連分野を包括的に取り上げ，それぞれの領域におい

て指導的立場にある研究者や新進気鋭の研究者による簡明な俯瞰と洞察に満ちた論考を収めた事典である。

「認知言語学と記号論（池上嘉彦）」「認知言語学と認知科学（山梨正明）」「言語学史から見た認知言語学（野村益寛）」「欧米日における認知言語学：その先駆けと現代の旗手（大月実）」「認知意味論と哲学（青木克仁）」からなる「第 1 章　総論」,「認知音韻論（熊代文子）」「認知形態論（鈴木亮子・大野剛）」「語の認知意味論（籾山洋介）」「認知文法（坪井栄治郎）」「認知文法の手法（熊代敏行）」「認知意味論（松本曜）」「使用（用法）基盤モデル（谷口一美）」「フレーム意味論（小原京子）」「認知語用論（岡本雅史）」「メンタル・スペース理論（坂原茂）」「構文文法（早瀬尚子）」「認知類型論（堀江薫）」「認知機能言語学（大堀壽夫・古賀裕章）」「認知詩学（大森文子）」からなる「第 2 章　理論的枠組み」,「身体性と経験基盤主義（堀田優子）」「カテゴリー化（瀬戸賢一）」「捉え方／解釈・視点（小熊猛）」「イメージ・スキーマ（篠原俊吾）」「メタファー・メトニミー・シネクドキ（瀬戸賢一）」「主観化・間主観化（菅井三実）」「参照点（尾谷昌則）」「文法化（堀江薫）」「ブレンディング（概念統合）（鍋島弘治朗）」からなる「第 3 章　主要概念」,「言語の起源・進化と認知言語学：比較認知科学的視点（岡ノ谷一夫）」「言語ラベルの進化：比較認知科学的視点（足立幾磨）」「歴史言語学と認知言語学（樋口万里子）」「捉え方の普遍性と多様性（吉村公宏）」（以上,「4A. 言語の進化と多様性」）「音象徴・オノマトペと認知言語学（篠原和子・秋田喜美）」「身体性と記号接地（今井むつみ）」「言語習得：認知科学と認知言語学の視点から（佐治伸郎）」「構文の習得（児玉一宏）」「日本における応用認知言語学の過去・現在・未来（森山新）」「英語教育と認知言語学（田中茂範）」「日本語教育と認知言語学（荒川洋平）」「自閉症児の認知能力と言語発達（渡部信一）」（以上,「4B. 言語の習得と教育」）「日本における認知言語学的比喩研究（瀬戸賢一）」「時制（テンス）と相（アスペクト）の認知言語学（樋口万里子）」「格と認知言語学（伊藤健人）」「ヴォイスと認知言語学（二枝美津子）」「モダリティと認知言語学（黒滝真理子）」「多義性と認知言語学（鷲見幸美）」「談話分析と認知言語学（林宅男）」「言語行為と認知言語学（高橋英光）」「コーパスと認知言語学（李在鎬）」「辞書における意味記述と認知言語学（宮畑一範）」（以上,「4C. 創造性と表現」）からなる「第 4 章　理論的問題」,「認知言語学と関連領域の連携（菅井三実）」「認知心理学と認知言語学（楠見孝）」「生態心理学と認知言語学（本多啓）」「認知人類学と認知言語学（井上京子）」「神経科学と認知言語学：意味と脳（大槻美佳）」「脳機能計測と認知言語学（月本洋）」「社会言語学と認知言語学（井上逸兵）」「コミュニケーションと認知言語学（平賀正子・浅井優一）」「唯識論と認知言語学（吉村公宏）」「自然言語処理と認知言語学（内海彰）」「神経心理学から見た認知と言語の諸相（古本英晴）」「手話と認知言語学（高嶋由布子）」から成る「第 5 章　学際領域」と 52 編のコラムを収め,末尾に「事項索引」「人名索引」を付す。（田中佑）

（2019 年 10 月 15 日発行　朝倉書店刊　B5 判縦組み　864 頁　22,000 円＋税　ISBN 978-4-254-51058-4）

庵功雄・田川拓海編『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す　第1巻――「する」の世界――』

本書は，日本語テンス・アスペクト研究を多種多様なアプローチ・視点から問い直す・捉え直すことを目的に企画されたシリーズの第1巻であり，主に「する」という形態に焦点を当てた論考を集めた論文集である。様々な立場からのテンス・アスペクト研究の前線と今後の展望を示すだけでなく，研究領域の横断的な相互理解に新しい知見と可能性をもたらすことを目指している。

本書の構成は次のとおり。「第1巻『「する」の世界』序論（庵功雄・田川拓海）」「不定（形）としてのル形と「か」選言等位節（田川拓海）」「スル・シタ・シテイルの意味をめぐる3つの問い（有田節子）」「「する」が未来を表す場合（仁田義雄）」「一人称単数主語の場合の心理動詞の使用に関する考察（伊藤龍太郎）」「Irrealisとしての接続法と未来（和佐敦子）」「中国語の「する」と「した」と「している」（井上優）」「日本語と韓国語のテンス・アスペクト形式について――「シテイル」形との対応関係を中心に――（高恩淑）」「テンス・アスペクトの教育（庵功雄）」。末尾に「索引」と「執筆者紹介」を付す。（阿久澤弘陽）

（2019年10月23日発行　ひつじ書房刊　A5判横組み　248頁　4,000円＋税　ISBN 978-4-89476-781-2）

森雄一・西村義樹・長谷川明香編『認知言語学を拓く』

本書は，2015年度から2017年度の成蹊大学アジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「認知言語学の新領域開拓研究――英語・日本語・アジア諸語を中心として――」がもととなった論文集であり，姉妹書である『認知言語学を紡ぐ』とともに，成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書としてまとめられたものである。

「序」に続く四部構成。「第1部　フィールド言語学と認知言語学」に「第1章　バスク語の名詞文・形容詞文の文法と意味（石塚政行）」「第2章　意図と知識――タガログ語のma-動詞の分析――（長屋尚典）」，「第2部　中国語研究と認知言語学」に「第1章　中国語の攻撃構文における臨時動量詞の意味機能（李菲）」「第2章　行為の評価からモノの属性へのプロファイル・シフトについて――中国語の難易度を表す形容詞の事例から――（三宅登之）」「第3章　中国語主体移動表現の様相――ビデオクリップの口述データに基づいて――（小嶋美由紀）」「第4章　中国語における直示移動動詞の文法化――［動作者名詞句＋来＋動詞句］の“来”の意味と文法化の道筋――（相原まり子）」，「第3部　語用論と認知言語学の接点」に「第1章　認知言語学と関連性理論（西山佑司）」「第2章　なぜ認知言語学にとって語用論は重要か――行為指示の動詞と項構造――（高橋英光）」「第3章　日本語の語用選好と言語特性――談話カプセル化を中心に――（加藤重広）」「第4章　提喩論の現在（森雄一）」，「第4部　言語変化と認知言語学」に「第1章　認知言語学と歴史語用論の交流を探る――MUSTの主観的義務用法の成立過程をめぐって――（眞田敬介）」「第2章　譲歩からトピックシフトへ――使用基盤に

よる分析――（大橋浩）」「第 3 章　ノダ文の通時態と共時態（野村剛史）」「第 4 章　副詞の入り口―副詞と副詞化の条件―（小柳智一）」を収める。末尾に「執筆者一覧」を付す。（阿久澤弘陽）

（2019 年 10 月 30 日発行　くろしお出版刊　A5 判横組み　336 頁　4,500 円＋税　ISBN 978-4-87424-813-3）

森雄一・西村義樹・長谷川明香編『認知言語学を紡ぐ』

本書は，2015 年度から 2017 年度の成蹊大学アジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「認知言語学の新領域開拓研究――英語・日本語・アジア諸語を中心として――」がもととなった論文集であり，姉妹書である『認知言語学を拓く』とともに，成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書としてまとめられたものである。

「序」に続く四部構成。「第 1 部　規則性と変則性のあいだ」に「第 1 章　日本語母語話者による英語メトニミー表現解釈における知識と文脈の役割（有薗智美）」「第 2 章　レトリックの認知構文論――効果的なくびき語法の成立基盤――（小松原哲太）」「第 3 章　創造的逸脱を支えるしくみ――Think different の多層的意味解釈と参照のネットワーク――（鈴木亨）」「第 4 章　母語話者の内省とコーパスデータで乖離する容認度判断――the reason... is because... パターンが妥当と判断されるとき――（八木橋宏勇）」，「第 2 部　認知意味論の諸相」に「第 1 章　生物の和名俗名における意味拡張（永澤済）」「第 2 章　百科事典的意味の射程――ステレオタイプを中心に――（籾山洋介）」「第 3 章　現代日本語における名詞「名」の多義性をめぐって（野田大志）」，「第 3 部　構文論の新展開」に「第 1 章　英語の接続詞 when――「本質」さえ分かっていれば使いこなせるのか――（平沢慎也）」「第 2 章　打撃・接触を表す身体部位所有者上昇構文における前置詞の選択――hit を中心に――（野中大輔）」「第 3 章　日本語における使役移動事象の言語化――開始時使役 KICK 場面を中心に――（古賀裕章）」「第 4 章　英語における中間構文を埋め込んだ虚構使役表現について（本多啓）」「第 5 章　主要部内在型関係節構文の談話的基盤（野村益寛）」，「第 4 部　認知言語学から見た日本語文法」に「第 1 章　再帰と受身の有標性（長谷川明香・西村義樹）」「第 2 章　再帰代用形「自分」と Image SELF――言語におけるリアリティをめぐって――（井川壽子）」「第 3 章　非情の受身の固有性問題――認知文法の立場から――（張莉）」「第 4 章　日本語受身文を捉えなおす――〈変化〉を表す構文としての受身文――（田中太一）」を収める。末尾に「執筆者一覧」を付す。（阿久澤弘陽）

（2019 年 10 月 30 日発行　くろしお出版刊　A5 判横組み　376 頁　4,500 円＋税　ISBN 978-4-87424-814-0）

竹沢幸一・本間伸輔・田川拓海・石田尊・松岡幹就・島田雅晴編『日本語統語論研究の広がり――記述と理論の往還――』

本書は，編者の一人であり，長年にわたり生成統語論，対照言語学，日本語文法論の研究に尽力してこられた竹沢幸一氏の還暦を記念して開催された言語学ワークショップ

「日本語統語論研究の広がり――理論と記述の相互関係――」（2017 年 3 月）の発展形として企画・編纂された論文集である。竹沢氏の論考を基調とし，竹沢氏が研究してこられた日本語の述語およびその周辺部，具体的にはテンス・アスペクト，格，否定，定形性，節構造などにおける形式と意味に対して，記述と理論の双方向からアプローチした論考が集められている。

構成は以下のとおり。「はしがき」に続き，「第Ⅰ部　基調論文」に「第 1 章　形容詞連用形を伴う日本語認識動詞構文（竹沢幸一）」，「第Ⅱ部　アスペクトと統語・意味」に「第 2 章 「ている」進行文の統語構造と数量副詞の解釈について（松岡幹就）」，「第 3 章「てある」文にみられる方言間差異（島田雅晴・長野明子）」，「第 4 章　経験相を表すテイル文と属性叙述――叙述類型論における記述と理論の融合に向けて――（鈴木彩香）」，「第Ⅲ部　テンスと統語・意味」に「第 5 章　素性継承システムのパラメータ化と日本語における定形節のフェイズ性（三上傑）」，「第 6 章　叙想的テンスの意味と統語（三好伸芳）」，「第Ⅳ部　コントロール構文と統語・意味」に「第 7 章　いわゆる定形コントロール構文の節構造とその成立要因（阿久澤弘陽）」，「第 8 章　日本語における後方コントロール現象（王丹丹）」，「第Ⅴ部　格と統語・意味」に「ナガラ節内における主格の認可について（石田尊）」，「第 10 章　対格目的語数量詞句の作用域，特定性，格の認可について（本間伸輔）」。「第Ⅵ部　述語形態と統語・意味」に「第 11 章　否定辞から語性を考える――3 つの「なくなる」と「足りない」――（田川拓海）」，「第 12 章　通言語的観点からみた日韓両言語における否定命令文（朴江訓）」，「第 13 章 「［名詞句］なんて～ない」におけるモダリティとしての否定述部（井戸美里）」，「第 14 章　事象類型の選択と状況把握――テンス・アスペクトおよび自他動詞――（佐藤琢三）」。末尾に「執筆者紹介」を付す。（田中佑）

（2019 年 11 月 10 日発行　くろしお出版刊　A5 判横組み　304 頁　4,500 円＋税　ISBN 978-4-87424-811-9）

野田尚史編『日本語と世界の言語のとりたて表現』

本書は，現代日本語における重要な文法概念の一つである「とりたて」について，日本語と世界の言語の共通点と相違点を明らかにしようとするものである。個々の言語の文法記述に従ってその言語のとりたて表現を記述するのではなく，現代日本語のとりたて表現との対照に重きを置いている点に本書の特色がある。

「この本の目的と構成」に続く 5 部 18 論考で構成されており，「第 1 部　とりたて表現の研究方法と研究動向」に「とりたて表現の対照研究の方法（野田尚史）」，「とりたて表現の研究動向（茂木俊伸）」を，「第 2 部　日本の言語のとりたて表現」に「日本語のとりたて表現の歴史（小柳智一）」，「日本語学習者のとりたて表現（中西久実子）」，「琉球語のとりたて表現（狩俣繁久）」を，「第 3 部　東アジア・東南アジアの言語のとりたて表現」に「韓国語のとりたて表現（鄭相哲）」，「中国語のとりたて表現（井上優）」，「タイ語のとりたて表現（峰岸真琴）」，「インドネシア語のとりたて表現（原真由子）」を，「第

4部　南アジア・西アジア・アフリカの言語のとりたて表現」に「ヒンディー語のとりたて表現（今村泰也・プラシャント＝パルデシ）」,「ネワール語のとりたて表現（桐生和幸）」,「シンハラ語のとりたて表現（岸本秀樹）」,「トルコ語のとりたて表現（林徹）」,「ヘレロ語のとりたて表現（米田信子）」を,「第5部　ヨーロッパの言語のとりたて表現」に「英語のとりたて表現（大澤舞）」,「ドイツ語のとりたて表現（筒井友弥）」,「フランス語のとりたて表現（デロワ中村弥生）」,「チェコ語のとりたて表現（ユラ＝マテラ）」を所収。末尾に「あとがき」「索引」「著者紹介」を付す。（田中佑）

（2019年11月16日発行　くろしお出版刊　A5判横組み　368頁　4,500円＋税　ISBN 978-4-87424-812-6）

山岡政紀編『日本語配慮表現の原理と諸相』

本書は，他者との対人関係をなるべく良好に維持することに配慮して用いられる慣習的な表現としての「配慮表現」について，その全体像を整理した上で，それでリストアップされた個々の表現に関する分析と，日本語教育への貢献を視野に入れた体系的整備のための他言語との対照研究の成果を示すものである。

「序章　配慮表現とは何か？（山岡政紀）」に続き,「第Ⅰ部　配慮表現の原理」に「第1章　配慮表現研究史（山岡政紀）」,「第2章　配慮表現の定義と特徴（山岡政紀）」,「第3章　配慮表現の分類と語彙（山岡政紀）」を,「第Ⅱ部　日本語配慮表現の諸相」に「第4章　配慮表現「ちょっと」の機能と慣習化――ポライトネス理論からの再検証――（牧原功）」,「第5章　配慮表現「よね」に見られる情報共有の諸相（金玉任）」,「第6章　とりたて詞「なんか」の捉え直し用法に見られる配慮表現（大和啓子）」,「第7章　配慮表現「させていただく」の違和感をめぐって（塩田雄大）」,「第8章　配慮表現としての「“全然”＋肯定形」（斉藤幸一）」,「第9章　引用表現における配慮表現（小野正樹）」,「第10章　モバイル・メディアにおける配慮――LINEの依頼談話の特徴――（三宅和子）」を,「第Ⅲ部　配慮表現と対照研究」に「第11章　代名詞の指示対象から見た対人配慮の日英対照（西田光一）」,「第12章　慣習的配慮表現の日中対照（李奇楠）」,「第13章　配慮表現の日本語・アラビア語対照――断り表現を中心に――（Lina Abdelhameed Ali）」,「第14章　配慮表現の日本語・ウズベク語対照――授受補助動詞を中心に――（岩崎透・Umarova Munojot）」を収録している。末尾に「あとがき」「索引」「編者・著者紹介」を付す。（田中佑）

（2019年11月18日発行　くろしお出版刊　A5判横組み　272頁　4,200円＋税　ISBN 978-4-87424-815-7）